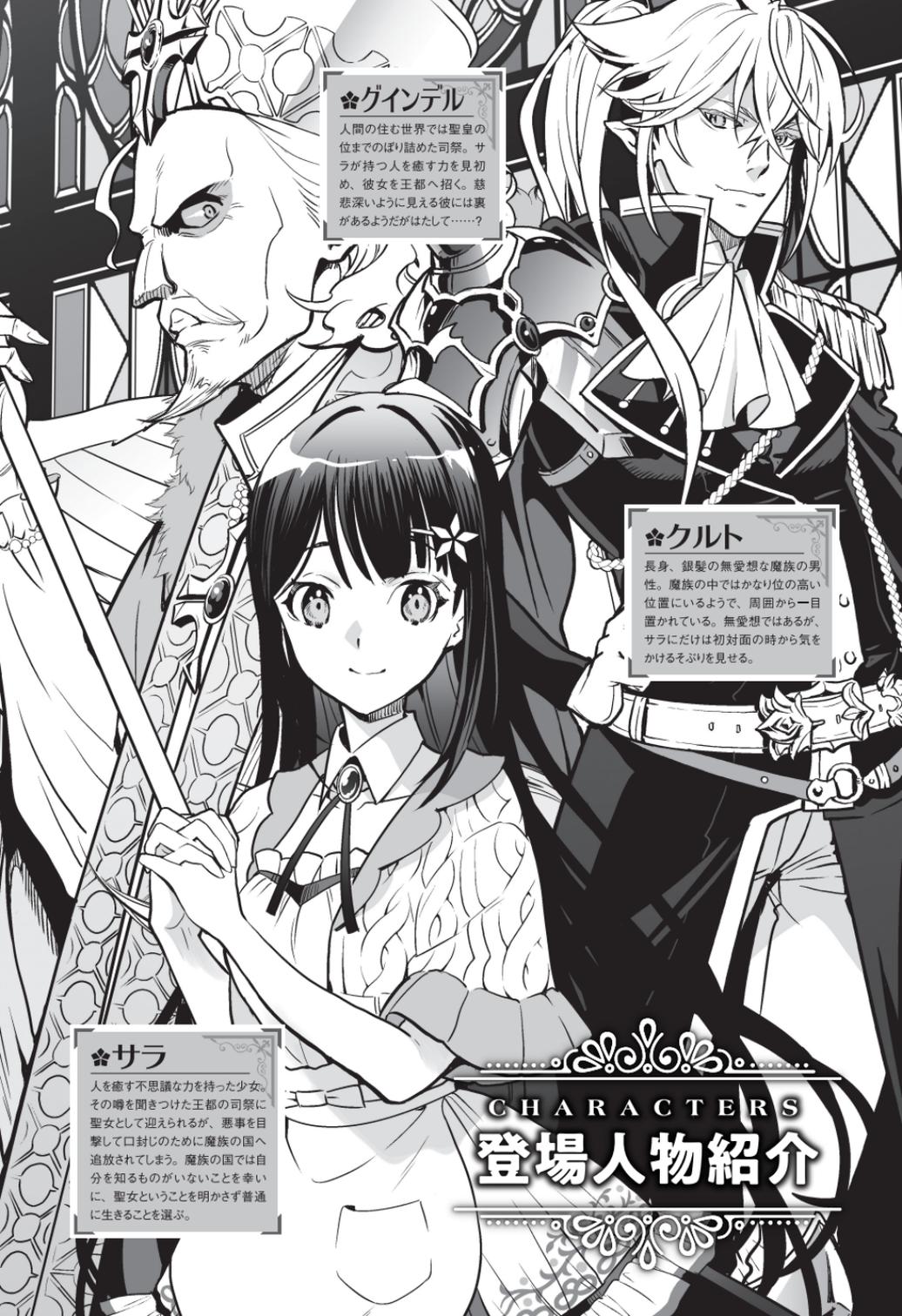


聖女は人間に

絶望しました

（追放された聖女は過保護な銀の王に愛される）



### ☆グインデル

人間の住む世界では聖皇の位までのぼり詰めた司祭。サラが持つ人を癒す力を見初め、彼女を王都へ招く。慈悲深いように見える彼には裏があるようだがはたして……？

### ☆クルト

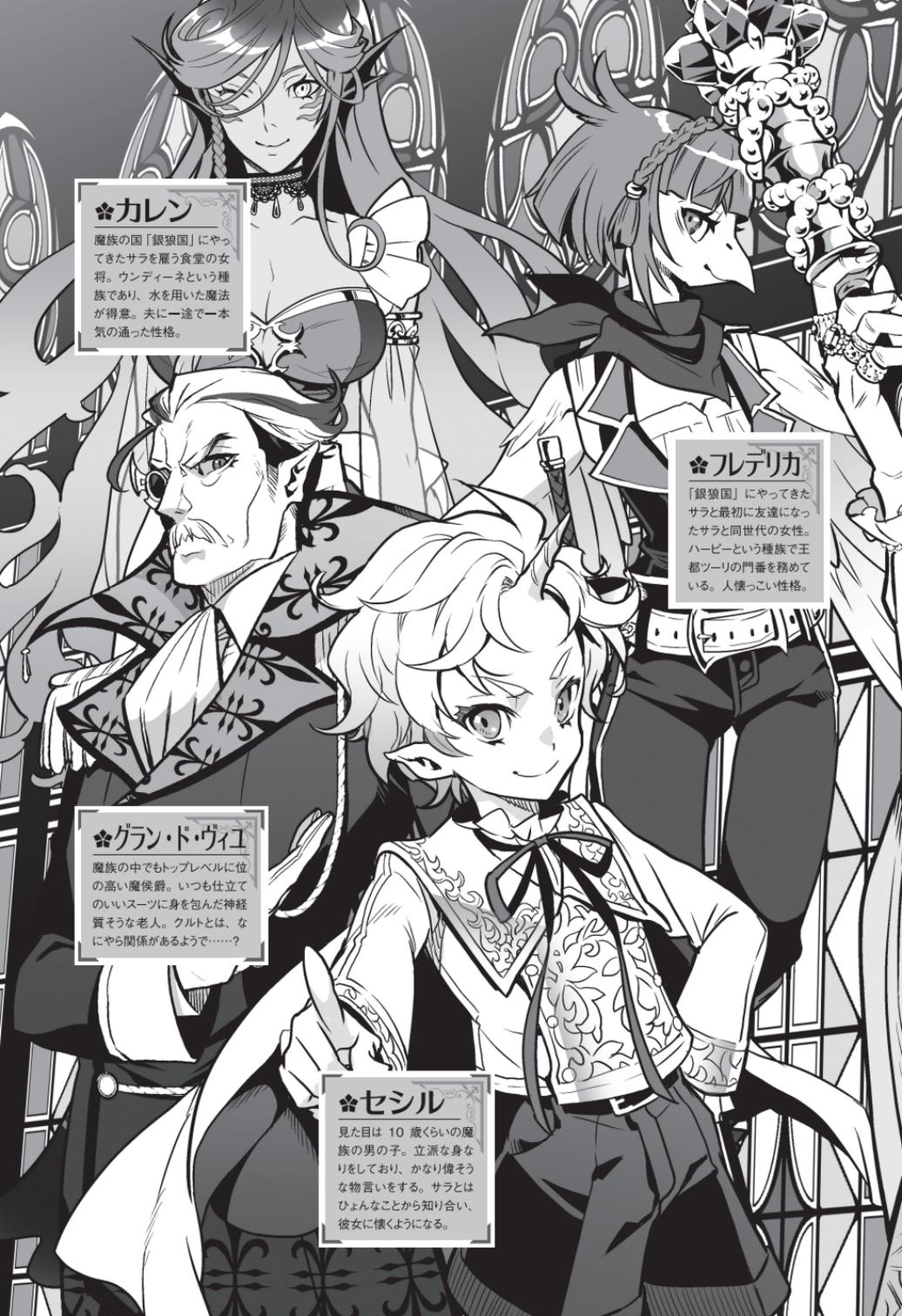
長身、銀髪の無愛想な魔族の男性。魔族の中ではかなり位の高い位置にいるようで、周囲から一目置かれてはいる。無愛想ではあるが、サラにだけは初対面の時から気をかけるそぶりを見せる。

### ☆サラ

人を癒す不思議な力を持った少女。その噂を聞きつけた王都の司祭に聖女として迎えられるが、悪事を目撃して口封じのために魔族の国へ追放されてしまう。魔族の国では自分を知るものがないことを幸いに、聖女ということも明かさず普通に生きることを選ぶ。

CHARACTERS

登場人物紹介



### ☆カレン

魔族の国「銀狼国」にやってきたサラを雇う食堂の女将。ウンディーネという種族であり、水を用いた魔法が得意。夫に一途で一本気の通った性格。

### ☆フレリカ

「銀狼国」にやってきたサラと最初に友達になったサラと同世代の女性。ハービーという種族で王都ツリーの門番を務めている。人懐っこい性格。

### ☆グラン・ド・ヴィエ

魔族の中でもトップレベルに位の高い魔侯爵。いつも仕立てのいいスーツに身を包んだ神経質そうな老人。クルトとは、なにやら関係があるようで……？

### ☆セシル

見た目は10歳くらいの魔族の男の子。立派な身なりをしており、かなり偉そうな物言いをする。サラとはひょんなことから知り合い、彼女に懐くようになる。



# 聖女は人間に 絶望しました

「追放された聖女は過保護な銀の王に愛される」

プロローグ	6
第一章 裏切り	13
第二章 出会い	42
第三章 少年と仮面	96
第四章 謝肉祭	173
第五章 因縁の敵	209
第六章 最後の戦い	232
エピローグ	273



## プロローグ

あの頃の私は、人を疑うことを知らなかった。

王都から遠く離れた長閑な村で、母と二人儉しい暮らしをしていた。

父は私が生まれて間もなく亡くなっており、暮らし向きは決して楽ではなかったが、村の人たちはそんな私たちに親切だった。

朝早くに起きて、母の手伝いをして、母の作るご飯を食べて、眠る日々。

当時の私にはそんな自覚なんてなかったけれど、きっとあの頃が人生の中で一番幸せだった。

母は優しい人だった。薬草に詳しく、行商人すらめつたに來ない村では薬作りの名人として慕われていた。

母は事あるごとに、私に言っておかせた。

「日頃の行いは、必ず自分に返ってくるんだよ。だから労を惜しまず誰かのために働いていれば、周りの人もサラのことを助けてくれるからね」

今にして思えば、母は己の死期を悟っていたのかもしれない。

だから一人残される我が子に、自給自足で生きる術を教え込んだのだと思う。そして村の人々と

の協調を教え、私が一人になっても困らないように心を砕いていたのだろう。

そんな母も、私が十歳の冬に流行り病であっけなく死んでしまった。

その瞬間の記憶が、私にはない。

ただ気が付くと、母ではなく私自身がベッドで寝かされていた。

「お母さん？」

誰もいない部屋に、私の声が虚しく響いた。家の中はしんと静まり返っていて、自分以外の人の気配が感じられない。家のどこにいてもその音が聞こえてくるような小さな家なのに。

しばらくぼんやりとしていた私は、母の病気を思い出しはっとした。そしてベッドを降りようとして転んでしまった。

「痛たた……」

床に手をつくすと、さらりと私の髪が視界をふさいだ。よくある焦げ茶色の髪は、なぜか漆黒に染まっていた。

私は驚いて悲鳴を上げた。

すると玄関のドアを開ける音がして、近所に住むエルマおばさんが部屋の中に飛び込んできた。

彼女は私を見ると、その目に同情と畏怖を浮かべた。そして私をベッドに戻すと、なにが起こったのかを説明してくれた。

彼女の話によれば、私の記憶が途切れたのと同時刻に、村中を真っ白い光が覆ったのだそうだ。

そしてその光が収まると、不思議なことに母と同じように流行り病に苦しんでいた病人たちが、ベッドから起き上がってきたのだと言う。

村は奇跡が起こったと大騒ぎになった。

そして心配して我が家を見に来てくれたエルマおばさんが、息絶えた母とそのベッドの傍らで目も髪も黒く染まった私を見つけたらしい。

後になって水鏡で見ると、確かに母譲りの緑色の瞳も真つ黒に染まっていた。

そしてその日から、私は不思議な力が使えるようになった。

人の怪我や病を、手をかざすだけで癒すことのできる不思議な力だ。

その力は母の作る薬よりも早く、圧倒的だった。手をかざして怪我や病が治るよう祈れば、たちどころに患部が癒えてしまうのだ。

村の人々は、私の存在を奇跡と呼んだ。

流行り病だった人たちとその家族からは深く感謝されたけれど、彼らの目はもう村はずれのサラちゃんではなく、理解できない恐ろしいものとして私を見るようになった。

癒しの力が噂になると、その力にあやかろうと小さな村に少しずつ人がやってくるようになった。やってきた人たちも癒すと噂が噂を呼んで更に人が詰めかけ、私の故郷は長閑な村ではなくなってしまう。

人が集まることで村が潤うことに、村人は喜んだ。

人を癒すことで患者からもその家族からも感謝され、私は自分がしていることが正しいのだと思  
い込んだ。

人を癒すたびに、その家族の笑顔を見るたびに、なんでこの力がもっと早く自覚めなかったのだ  
ろうと思わない日はなかった。

この力で母を癒すことができれば、私はこんなにも孤独を感じることはなかっただろう。

そう、私は孤独だった。

「サラ様。今日は遠方の村から患者が来ています」

私の世話役になったエルマおばさんは、もう私をサラちゃんとは呼んでくれなくなった。

重い病氣や怪我を癒すほどに、感謝されるけれど同時に周囲の人との距離も遠くなっていく気が  
した。

それでも、私はやってくる人たちを癒し続けた。誰かに、私や母のような思いをさせたくなかつ  
た。患者やその家族が喜ぶ姿を見て、私の心は癒された。患者の数はどんどん増えていったけれど、  
私はこの力を使って彼らを癒し続けた。

不思議なことに、癒しの力は尽きることがなかった。むしろ、使えば使うほどその力は強まって  
いくような気がした。

そんな生活が、一年ほど続いただろうか。

ある日突然、田舎の村に見たこともないような立派な馬車と、白銀の鎧よろいを纏まとった軍隊が大挙し

てやってきました。

馬車から下りてきたのは、白い法服を纏った壮年の男性だった。

当時まだ、司祭の一人にすぎなかったグインデルだ。

「お迎えに上がりました。聖女様」

グインデルは、私を初めて聖女と呼んだ人だった。

「聖女……？」

だが、私は聖女というものを知らなかった。それは村の人たちも同様だった。読み書きのできる人間がほとんどいないような田舎だ。伝説上の存在である聖女を知る人がいなかったのは仕方ないことだろう。

その日の晩、私はグインデルから聖女がどのようなものであるか説明を受けた。

かつて異界からやってきて、癒しの力で人々を救った聖女という存在がいたこと。その聖女を祀っているのがこの国の国教であるミミル聖教であり、グインデルはその司祭だということ。

ミミル聖教がどういふものかはまだよく分からなかったけれど、グインデルの引き連れてきた軍勢を見れば子供ながらにただならぬ相手であることは理解できた。

彼は、私を王都に連れて行くと言った。聖女としての務めを果たすべきだと。

けれど私は迷った。母と暮らした村を離れたくはなかったし、ここには私を必要としてくれる患者たちがまだまだたくさんいたからだ。

洪る私に、グインデルは言った。

「この国には、あなたのお力を必要としている者がまだまだたくさんおります。この地では救える者にも限りがありますよ。本当にそれが正義とお思いか？」

グインデルは私が子供だからと言って、言葉を飾るようなことはしなかった。

この国は広く、そこに暮らす全ての人を救うのは私の力でも不可能だ。それでも彼の言う通り、この小さな村に固執して遠くの人を見捨てるのは、正しいことではないような気がした。

母もきつと、私が母との思い出しがみついて村に残るより、たくさんの人を助けた方が喜んでくれるに違いない。

私はグインデルと一緒に、王都へと向かう決意をした。

母の遺言通り、労を惜しまず誰かのために働くのだ。そしてもつとたくさんの人に笑顔になってもらいたい。

村人たちには引き留められた。癒しを求めて集まる人たちのために宿屋を開いた人や、お土産屋を始めた人もいた。

そんな人の中には、私を連れ去ろうとするグインデルに食って掛かる人もいた。といっても、彼の護衛をしていた神殿騎士たちによってすぐに押しとどめられていたのだけれど。

後ろ髪を引かれる思いが、なかったわけではない。ここには母との思い出がある。

けれど人々を助けたいという自分の想いに、逆らうことはできなかつた。今は怒っている人たち

も、きつといつか分かってくれる。

そう思い、私は生まれ育った村を後にした。

その日から、私は聖女として生きることになった。



## 第一章 裏切り

聖女としての生活は、思いのほか忙しい。

まずは夜明け前に起きて、沐浴をする。薄衣うすぎぬで冷たい水に入り、身を清めるのだ。

神殿にやってきたばかりの頃は、どうしてこんなことをしなければいけないのかと訳が分からず泣いた。

まだ十一歳の私。幼かったのだ。

今は、齒を噛み締めて我慢する術を知っている。

冬は心身が凍えそうなほどに冷たいけれど、七年も繰り返していると流石さすがに慣れる。

側仕えの差し出す厚手の布で水気を拭き取り、それから一時間ほどが祈りの時間だ。

子供の頃は知らなかったのだが、私が暮らしている国はユーセウス聖教国と言い、ミミル聖教と呼ばれる宗教が国教として尊ばれていた。

ミミル聖教は近隣諸国でも信仰されていて、その宗主たる聖皇は一国の国王よりも強い権力を持つのだそうだ。

あの日私を迎えに来た軍隊のように思われた一軍は、ミミル聖教を護まもる神殿騎士によって構成さ

れたものだった。なので厳密には軍隊ではないのだそうだ。

そうして私は、ミミル聖教の聖女となった。

祈りはミミル聖教の辿たどってきた歴史をたどるものである。

その起源は、およそ二百年前にまで遡さかのぼる。まだこの国がユーセウス王国と呼ばれていた頃、突如として聖女が現れたのだそうだ。

聖女は私と同じように黒い目に黒髪姿で、異世界からやってきたと証言したという。

彼女は私と同じように、人の怪我や病を癒す力を持っていた。それだけではなく、穢けがれを浄化し魔族を退けることができた。

魔族というのは、人を食べたり言葉巧みにだましたりする卑しい種族を言うらしい。私は見たことがないのだが、遠く海を隔てた大陸に暮らしているらしい。

二百年前の昔、その魔族が海を越えて人間の国に攻めこんできたのだ。そしてそれを救ったのが異世界から現れた聖女だった。

聖女はこの国で生き、そして死んだ。

前回の聖女と同じ力を持つ私を、ミミル聖教会は新たな聖女だと判断したのだという。

私は異世界などではなくこの国出身だけれど、そんなことは些事なのだそうだ。

「精が出るな」

ふと、祈りの間に私のものではない足音が響いた。

祈りの間は大理石でできていて、音を立てるとよく響く。

かけられた声はよく知った人物のそれだったので、私は驚いたりはしなかった。

ちように祈りが終わりがけていたので、私は最後の聖句を口にして顔を上げた。

そこに立っているのは、赤い枢機卿すうききょうの法衣ほふえに身を包んだグインデルだった。

出会った時は一司祭であったグインデルも、この七年の間に枢機卿になるまでに出世していた。

ちなみに枢機卿というのは、司祭の中から特別に選ばれた十人を言う。

この十人のうちの一人が、次代の聖皇となるのだ。

「グインデル様……」

私と呼びかけると、グインデルは日に焼けた気難しい顔を少しだけ緩めた。

彼が日に焼けているのは、他の枢機卿たちと違い頻繁おもしに遠方に赴き講話や祝福を行っているか

らだと聞いた。

「いい心がけだ。サラのおかげで信徒たちは恙つつがなく心穏やかに暮らせよう」

グインデルは唯一、私のことをサラと昔の名前で呼ぶ。

その響きを聞いたときに、私は聖女という生き物ではなくただのサラなのだということを思い出す。

私は立ち上がると、目の前のグインデルを見つめた。

「聖皇ご即位が決まったと聞きました。お祝い申し上げます」

先日、聖皇が崩御ほうごした。すぐに十人の枢機卿による合議が行われ、昨日次期聖皇はグインデルに

決定したという報せが入った。

なので私は、グインデルに会ったらすぐにお祝いを言おうと決めていたのだ。

するとグインデルは、驚いたのか小さな目を瞬かせた。

「なんだ、知っていたのか。身に余る光栄だが、これで我が宿願も果たされよう」

グインデルの宿願というのは、排他的なミミル聖教の門戸を開き、もつと多くの人にミミル聖教の教えを授けたいというものだった。

詳しいことは分からなかったが、グインデルが精力的に取り組んでいる様子を見れば、なにか大切な仕事をしているということは分かる。

外に出ることができない私はその手伝いをすることはできないけれど、彼の望みが叶うのは純粋にいいことだと思っていた。

この神殿にやってくる信徒たちは、ミミル聖教のおかげでどれだけ自分たちが幸せになったかということを嬉しそうに語ってくれる。

誰かの役に立てるのは素晴らしいことだ。

祈りと献身によって彩られた日々は味気なくどこか虚しいけれど、癒しの力を使い人に感謝されると充足感を感じることができた。

「日頃の行いは、必ず自分に返ってくるんだよ。だから労を惜しまず誰かのために働いていれば、周りの人もサラのことを助けてくれるからね」

こうして人のために働くことこそが、きっと母の望んでいた生き方なのだ。それに村にいた頃よりもっとたくさんのことを癒すことができるようになり、私は満足していた。村を出るといふ決断をした自分が、間違っていないかと思うことができただけだ。

たくさんの人を癒し、私はたくさんの人に感謝された。

一方で、ミミル聖教の後ろ暗い部分を知ることもあった。司祭や枢機卿の中には信徒から多額のお布施を要求する人もいて、グインデルはいつもそんな人たちに対して腹を立てていた。

だから彼が聖皇になれば、ミミル聖教はもっと良くなる。私はそう信じて疑わなかった。

それから半年後、グインデルの即位式が盛大に行われた。

普段礼拝が行われる礼拝堂にはたくさんの人が詰めかけ、窓の外をパタパタと白輝鳩が飛ぶ。

野生のそれではなく、神殿内で飼われている特別な白輝鳩だ。ミミル聖教において白輝鳩は神の言葉を伝える聖獣だとされている。

今日は特別な日なので、白輝鳩が空に放たれているのだ。逃げてしまわないのか不思議になってお付の人に聞いたら、躑しけてあるので大丈夫だという返事だ。

ちなみに普段、私は決して白輝鳩に近づかないように言われている。白輝鳩を見たのも、聖女としてのお披露目の日以来二回目だ。

理由はなぜだか分からない。でも神殿には他にもたくさんの決まりがあるので、この決まりを私が不思議に思うようなことはなかった。

礼拝堂に歓声が上がる。私は意識を引き戻された。グインデルを見る人々の顔は、喜びで彩られていた。これも今までの彼の活動のおかげだろう。

壇上に立ち人々の祝福を一身に集めるグインデルは、日に焼け深い皺しわの刻まれた顔を今日ばかりはうつすらとほほ笑ませていた。

式は佳境に差し掛かり、重厚なパイプオルガンの曲が流れる。

私は聖皇の証あかしである黄金のミトラを手に、跪ひざまずくグインデルに近づいた。聖女がモチーフとなったステンドグラスから光が差し、グインデルの豪華な法衣こうしやを赤く染める。

私は髪の薄くなったグインデルの頭にミトラを授けた。

彼はゆっくりと立ち上がり、聖皇であることを示す聖杖せいじょうを手に両手を大きく掲げる。

歓声が大きくなり、礼拝堂に拍手の音で満ち溢れた。

私も詰めかけた人々と同じように、グインデルに惜しみない拍手を送った。



その日は、朝からあまり体調がよくなかった。

なのですぐにその旨むねを申告し、その日のお勤めは休むことになった。

聖女なのだから、癒しの力を自分に使えばいいと思われるかもしれないが、残念ながら私は自分

の怪我や病気を癒すことができないのだ。

このことは、王都にある神殿に連れてこられてすぐに分かった。

慣れない長旅で疲れから寝付いてしまい、しばらく身動きが取れなかったからだ。

おかげで本当に聖女なのかと疑いをかけられ、もう少しで神殿から追い出されそうになったこともある。

なんでも、かつての聖女は自分の怪我すらも癒すことができたそうだ。

グインデルの訴えでどうにか追い出されるのは免れ、回復した私は無事聖女として認められたわけだが。

以来、神殿は私の体調に敏感だ。少しでも不調があると、休息と最高の治療が与えられるようになった。

自由のない生活ではあるけれど、衣食住が保障され医療まで与えてもらえるのだから、私は恵まれているのだろう。

人々を救うという使命を果たす毎日に、充足を感じてもいた。誰かに必要とされているという事実が、天涯孤独となった私の心を満たしていたのだ。

薬湯を飲んで眠りにつき、目が覚めたのは夜中だった。

交代の時間なのか、お付の人もない。部屋の中は静かで、私は久しぶりに一人きりの時間を味わった。

そもそも朝起きてから寝るまで、常にお付の人がいることの方がおかしいのかもしれない。ふと、そんなことを思った。

小さな頃は気にならなかつたが、最近では見張られているような気さえする――。

私は喉の渴きを覚え、部屋を出ることにした。

お付の人はいつ戻ってくるか分からなかつたし、水を飲むだけならば問題ないだろうと判断したからだ。

正直に言うと、一人きりというこの貴重な時間を、早々に眠って浪費してしまうのは勿体ないように思えた。

音が出ないよう、裸足はだしのまま寝台を抜け出し部屋を出る。

石の床はひんやりと冷たく、歩くとひたひたと足の裏にすいつくような感じがした。

廊下には誰もおらず、まるで世界中に自分以外誰一人いなくなってしまったかのように静まり返っていた。

明り取りの窓から、冷たい月光が差し込んでいる。

私は中庭にあるという、井戸を目指して歩いていた。

一度も行ったことのない場所だ。いけないと思いつつ、私は高揚していた。

その時、私の耳にはさばさと鳥が羽ばたくような音が聞こえた。不思議に思つて見上げると、天井の明かり取りに白輝鳩が止まってこちらを見ていた。

普段近づいてはいけないと言われている相手だ。

私はぎくりとした。

まるで白輝鳩に見張られているような気がした。そんなはずはないのに。

でももしここで白輝鳩が騒いだりすれば、何かと人が来てしまうだろう。

すると私は、お付の人なしで部屋を出たことと白輝鳩に遭遇したこと。二つの規則を破っていることになる。

最近では滅多にないことだけれど、ここに来たばかりの頃は規則を覚えきれなくて、何度もしげ寐ひという名のお仕置きをされた。

狭い部屋に閉じ込められ眠ることすら許されず祈り続けるのは、子供心に辛く思い出したくない記憶だ。

先ほどまで感じていた高揚はしゆるしゆると音を立てて萎んでいき、私の中で葛藤が生まれた。

本当にこんなことをしているのか。今すぐ部屋に戻って何もなかったことにするべきなのではないかと。

けれど、喉が渴いているのも本当だ。

一度それを自覚してしまふと、もう水を飲まないことには眠れそうになかった。

結果として私は、白輝鳩を無視して先に進むことにした。もしこの場を誰かに見られたとしても、白輝鳩に気づかなかつたことにすればいい。

私は更に慎重に足を進めた。

そして明かり取りの窓の真下に来た時、恐れていたことが起きた。

白輝鳩が、私の目の前に舞い降りたのだ。

翼を広げ、まるで自分の存在を知らしめているかのようなようだった。

これではもう言い訳は効かない。今すぐ部屋に逃げ帰るべきだ。飼いならされた理性が警鐘を鳴らす。このことがばれたらどんな目に遭うか——。

けれど私は恐怖を感じる一方で、目の前の白輝鳩の美しさに見とれていた。

月光を浴びた白輝鳩は、まるでそれ自体が発光しているかのように白く輝いていた。

深い緑の瞳には、鳥類とは思えない知性を感じられた。そしてその色は、今は亡き母の目の色に似ていた。

『ココニ……イテハ……イケナイ』

途切れ途切れに、声が聞こえた。

聞き覚えのない声だ。慌てて周囲を見回したが、そこには誰の姿もない。

静まり返った廊下にあるのは、私と目の前の白輝鳩の姿のみだ。だが、白輝鳩が人の言葉を喋しゃべるなんて聞いたことがない。

もしかして、魔族だろうか。

私の脳裏にそんな考えが浮かんだ。

魔族は、人間たちとは海を隔てた場所に住むという。時折こちらにやってきては、人を襲ったりするのでそうだ。

二百年前の聖女は、人の国に攻めてきた魔族を打ち払い、人の世界を守った。

以来大きな侵攻はないが、もしその時が来れば聖女は魔物と戦わなければいけないのだそうだ。そのため、私を受ける座学には魔族について学ぶ時間も多くあった。

魔族の中には、人語を解したり他の生き物に化ける者もあるという。ならば目の前の白輝鳩が、そうではないと誰が言えるだろうか。

神殿で飼われている白輝鳩が魔族のはずがないと思いつつ、ばくばくと心臓が大きな音を立て、こめかみを汗が滑り落ちた。

私は聖女だが、できることは人の怪我や病気を癒すことだけだ。魔族を倒したことなど一度もないし、それどころか見たことすらないのだ。

今すぐ逃げ出したい気持ちになったが、背中を向けた途端に襲い掛かれるのではないかと思うと、それもできなかった。

何より、足が震えてまともに走ることができそうにない。

それからしばらくの間、私は息をひそめて白輝鳩を見つめていた。あちらもまた、まっすぐに私のことを見つめている。

いつまで経っても、白輝鳩が私に襲い掛かってくることはなかった。

むしろどこか憐れみすら含んだ目で私を見つめ、そして言った。今度はくちばし嘴口を動かしていたのだ。私はこの声が白輝鳩のものだと確信した。

『アナタ、ハ……ニゲテ……シアワセニ……』

その言葉があまりにも悲し気で、私は白輝鳩に感じていた恐れが弱まるのを感じた。

そして、気づけば問いかけていた。

「どうして？」

返事が返ってくるという確証はなかった。

だが、白輝鳩の言葉が無意味であるようには、どうしても思えなかった。

私の問いに答えようとしたのか、白輝鳩が嘴を開いたその刹那。せつな

「助けて！」

遠くからかすかに、悲鳴と共に助けを求める声が聞こえた。

私がそちらに気を取られていると、白輝鳩は瞬く間に跳び上がり、入ってきた窓から飛び出して

行ってしまった。

時間にすれば五分にも満たないだろう。

あまりにも現実感のない出来事に、取り残された私は茫然とした。

だがしかし、ずっとそうしていることはできなかった。

それは先ほど悲鳴がした方角から、今度は人の言い争うような声が聞こえてきたからだ。

静謐せいひつを尊ぶ神殿内にあつて、これは明らかに異常事態だった。

何が起こっているかは分からないが、もしかしたら怪我人が出ているかもしれない。

私は先ほどの不思議な出来事を頭から振り払い、慌てて声のする方向へと向かった。



しばらく走って、私はすぐに裸足できたことを後悔した。石の床は冷たく、指先がかじかんでうまく走れなくなる。

それでも頑張つて声のした方へ向かうと、たどり着いたのは私が立ち入ってはいけなと言われていた区域だった。

かつて聖女が倒した魔王の体が安置されているという、地下に続く階段だ。

私はその場で立ち止まり、逡巡しゆんじゆんした。

この階段を下りたことがばれたら、おそらくお仕置きは免れない。たとえこの下に助けを求める人がいたとしても、それは変わらないだろう。

けれど、だからといって苦しんでいる人がいるのにそれを見過ごすことは、私にはできなかった。そして階段の底から新たに聞こえてきた子供の泣き声が、私の背中を押した。

子供がいるならなおさら、見過ごすことなんてできない。

そして私は裸足のまま、地下へ続く階段を一步一步下り始めた。

神殿の通路と違い、地下へ続く階段は古くごつごつとした石でできている。掃除も頻繁ではないのかざらざらと劣化した石の感触がした。足の裏に痛みが走る。

一瞬靴を取りに戻ろうかと迷ったが、すぐにその考えを振り切った。

子供の泣き声は続いている。もしかしたら一刻を争う事態かもしれないのだ。

私は足の痛みを無視して、階段を駆け下りた。途中足の裏が切れて血が出たが、もう立ち止まったりはしなかった。

どれくらい下りたのだろう。かなり長い階段だ。

息が切れてきた頃、ようやく階段の終わりが見えた。

魔王の体が安置されているなんてどんなに恐ろしいところだろうと思っていたけれど、そこにあるのは土が踏み固められた床と、円形の広い部屋だけだった。壁には松明たいまつが焚たかれ、ぼんやりとした明かりが灯ともっている。

禍々まがまがしい気配を感じて、私は急いで身を隠した。

よく見ると、部屋の真ん中に漆黒の門のようなものが立っている。魔物の彫刻が施された、禍々しい門だ。どこにもつながらないはずの門。なのに、開いた門の向こうには黒々とした闇が見えた。まるでその門の向こうは、全く別の空間と繋がっているかのようだ。

本能で、あれはよくないものだと思える。こんな危機感を抱いたことは、今まで一度もなかった。

あれが魔王の遺体となにか関係があるのだろうか。不思議に思っていると、再び子供の泣き声が聞こえた。

「やだー！」

「うるさい！ おとなしくこっちにこいっ」

声のした方を見ると、ボロボロの服を着た子供の手を、法衣を着た男が乱暴に引っ張っていた。

そして男はついに、その子供を門の中へと押し込んでしまった。子供の姿はねっとりとした闇の中に消えて、その泣き声もすぐに聞こえなくなってしまった。

それからどんなに待っても、子供がこちら側に戻ってくることはなかった。

暗くて見づらいのだが、部屋の中には粗末な服装をした人たちが何人もいるようだった。格好から見て、聖職者とは思えない。皆後ろ手に縛られ、俯いている。

そして何より驚きだったのが、その人々を監督しているのが普段生活を共にしている神官たちだったことだ。

彼らは泣き叫ぶ人々に対して有<sup>う</sup>無<sup>む</sup>を言わさず、乱暴な手つきでどんどん門の中に人を押し込んでいった。

その門の先に何があるかは分からないが、その行為が人々のためにならないことは明らかだ。

「早く静かにさせろ」

そして奥の暗がりから、更に別の人物が姿を見せた。

私は思わず息を呑む。

その人物は、枢機卿であることを表す赤い法衣を身に纏っていた。ミミル聖教の中でも、十人しかいない枢機卿の内の一人。

確か彼は、聖皇となったグインデルの代わりに枢機卿になったばかりの男だ。

そして枢機卿は基本的に、前任者の推薦によって後任の人物が決まる。つまり彼は、グインデルが推薦した人物ということになる。

グインデルと親しい男だからと言って、彼が正しいことをするとは限らない。そして目の前の光景は、どうも鼻<sup>ひ</sup>眞<sup>ま</sup>目<sup>め</sup>に見ても人々のためになるようなこととは思えなかった。

きつとグインデルは、この男に騙<sup>だま</sup>されたのだ。

私の中に、俄<sup>にわ</sup>かに怒りが湧きおこった。

グインデルはあれほど人々のことを考えているというのに、その後任たる枢機卿がどうして人を苦しめるようなことをするのか。

そして、今すぐにこの事態をグインデルに報せようと決意した。

私が今飛び出していったところで、男たちになうはずがない。更には、生半可な相手では枢機卿がいるこの場では丸め込まれてしまう可能性もある。

だから聖皇に即位したグインデルに来てもらって、彼らを取り押さえるのが一番だと考えた。グインデルが現在のミミル聖教会の最高権力者だ。誰もその決定に逆らうことはできない。

私は音をたてないように気を付けつつ、急いで今下りてきた階段を上り始めた。背後から次に入られようとする人の悲鳴が聞こえてくる。

どうしようもなく悲しい気持ちになりながら、私は必死にグインデルの私室へと向かった。



途中何度も神殿騎士に止められたけれど、私が聖女と知ると下手に手出しできないらしく、思ったよりすんなりとグインデルの私室までたどり着くことができた。

ノックをする時間も惜しく扉を開ける。

「グインデル！ 大変なの」

すっかり寝静まっているのか、部屋の中は真っ暗だ。

「いけません！」

神殿騎士が叫ぶ。けれど私は止まらなかつた。そのままずかずかと部屋の中に入り込む。

私の足の汚れのせいで、絨毯じゅうたんが汚れた。

天蓋てんがいのついた大きな寝台の中で、布団ふとんの下の塊かたまりが身じろぎをした。

「グインデルってば！」

慌あわてていたせいで、昔のような礼儀れいぎの欠片かけらもない口調くちようになった。

けれど彼も私の用件さえ知れば、そんなこと気にしないだろう。それほど非常事態なのだから。身じろぎした寝台から、気だるそうな返事が返ってきた。だがその返事は、思ってもみないものだった。

「なあに？ 騒がしい……」

それはグインデルとは似ても似つかない、艶やかな女性の声だった。私は呆気にとられ、足を止めた。

カチカチという音がして、ランプの蝋燭が灯される。

橙色の光に浮かび上がったのは、寝台から体を起こした妙齢の女性だった。彼女は眠たげに目をこすりながら、迷惑そうに私を見ていた。

「え……？」

私は頭が真っ白になってしまった。

ここはグインデルの部屋ではなかったのかもしれないとすら思った。

だってミミル聖教会の教義では、姦淫は禁止されている。

けれどその女性は、起き上がった上半身になにも身に着けていなかったし、今も恥ずかしげもなくその胸を晒している。

そしてその女性の隣で、見覚えのある日焼けた顔がむくりと起き上がった。

「何事だ一体？」

いらだたし気なかせれ声に、私は息を呑んだ。

それは間違いなく、グインデルの声だった。

「グインデル……ねえその人は誰？」

私はこの期に及んでもまだ、目の前の光景にはなにか理由があるのではと思おうとしていた。

いつも熱心に理想を語るグインデルが、誰よりも規律に厳しい彼がまさか、教義に背くはずがない。

「サラか？ どうしたんだ。こんな時間に」

彼は私の問いには答えず、来訪の理由を聞いてきた。

だがその言葉で、私は我に返った。

今はグインデルの教義違反を追及している場合ではない。地下での出来事をグインデルに報せねばならないのだ。

「そうだ！ 大変なの。さっき地下室に行ったらたくさんの人がいて——」

私がそう言うと、部屋の中の空気が凍ったのが分かった。

「地下室に行ったのか？」

グインデルが言う。

確かに言いつけを破ったのは悪かったが、今はそれどころではないのだと分かってほしかった。

今にも、あそこにいた人々が門の向こうに送られてしまうかもしれない。

「ごめんなさい。だけど大変なの。真っ黒い門があって、神官たちがそこに無理やり市民の人たちをつ、子供まで……」

そこまで話したところで、私は思わず黙ってしまった。

寝台から抜け出してきたゲインデルが、こちらに近づいてきたからだ。

彼は上半身裸で、腰にシーツを巻き付けていた。

かなりの歳のはずだがその体は鍛え上げられ、なぜか傷跡のようなものが沢山あった。

私は思わず後退る。けれどすぐに、それ以上後ろに下がれなくなってしまった。後ろにいた神殿騎士にぶつかっただのだ。

「捕まえろ」

聞いたことがないような冷たい声で、ゲインデルが言った。

「で、ですが聖女様にそんな」

神殿騎士が動揺したように問い返した。その言葉を、ゲインデルが遮る。

「聞こえなかったのか？」

「は！」

すぐさま、私は神殿騎士たちに拘束された。

背中から二人がかりで羽交い絞めにされては、身動きすることすらできない。

「え……?」

頭が真っ白になって、なにか言おうと思うのにそれしか声が出なかった。

女性と床を共にしていたグインデル。地下で怪しい作業に従事していた枢機卿。その枢機卿はグインデルの後釜だということ。

後になって考えれば、グインデルが地下室の出来事に関わっているのは明白だったのかもしれない。

けれどその時の私は、どうしてもそのことが信じられなかった。

いや、信じたくなかったのかもしれない。

父親のいない私にとって彼は、ずっと父親代わりとも言える人だったのだ。



拘束された私は、そのまま先ほどの地下室へと連行された。

ガウンを纏ったグインデルと、神殿騎士二名。それに私が部屋の中に入っていくと、枢機卿をはじめ地下室にいた男たちはぎょっとしたように動きを止めた。

「どうしたのですかグインデル様？　このようなところへ……」

枢機卿が近づいてくると、あろうことかグインデルは枢機卿を殴った。まさか殴られるとは思っていなかったのだらう。枢機卿は目を見開いたままあお向けに倒れていった。

勿論私も驚いていた。グインデルが暴力をふるうところなど初めて見たからだ。ミミル聖教の教義でも、暴力は禁じられている。

「まったく。奴隷たちを見られおって」

忌々しそくにグインデルが呟いた。

奴隷という言葉の不穏な響きに、私はぎくりとした。教義どころか、奴隷はユージェウス聖教国の法律で厳しく禁じられている。

殴られた枢機卿が、頬を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

「そ、それはどういうことで……?」

「その娘が、お前たちがおかしなことをしていると知らせに来た」

そう言うと、枢機卿は怯えたように私を一瞥し、叫んだ。

「まさかそのような！ 人払い完璧にしておりました。聖女様が起きてきたというならば、それは眠り薬の効きが悪かったのでしょうか。私の不手際では……」

私はぞっとした。

枢機卿の話が正しければ、私は彼らの悪事に気づかないよう眠り薬を飲まされていたというのだ。私の脳裏に、姿のなかった側仕えの顔が浮かんだ。

彼女たちに用意された食べ物や飲み物を、疑ったことは一度もない。それは言い換えれば、いつでも菓を盛ることができたということだ。

もはやどれだけの人が今日の出来事に関わっているのか、想像すらつかなかった。

グインデルは今やミミル聖教会の頂点だ。彼が白と言えば、黒いものだって白くなるだろう。

「言い訳など聞きたくない。お前たち、今日の分は終わったのか？」

見ると、部屋の中には神官と枢機卿以外誰もいなかった。

私がグインデルを呼びに行っている間に、ここにいた人たちは全員黒い門の向こう側に送られてしまったらしい。

「はい。ちょうど今終わりました。黒門を閉じようというところで」

漆黒の門は、黒門という名前であるらしい。

グインデルは少し考えるように黙り込んだ後、私の方を見た。

正しくは、私を押さえつけている神殿騎士を見たと言った方が正しいかもしれない。

「おい、そいつをここへ連れてこい」

グインデルが指したのは、黒門の真ん前だった。

後ろで神殿騎士たちが息を呑んだのが分かった。

「早くしろ」

「は！」

そうして私は、闇が広がる不思議な門の目の前に立たされた。

「サラ。今日ここで見たことは忘れるんだ」

グインデルの言葉に、私は耳を疑った。

「何を言っているの？」

「かしこくなれサラ。その口を閉じていれば、今まで通り何不自由のない生活が送れるんだ。でなければ、お前もこの門の向こう——人を喰う魔族の国に送ることもできるんだぞ？」

体に震えが走る。

グインデルは私を脅しているのだ。今日見た出来事をなかつたことにしろと。それができなければ、残忍な魔族のいる門の向こうに送るぞと。

かつての聖女のように、魔族を退ける力なんて私にはない。もし魔族の国に送られたりしたら、まず間違いなく殺されてしまうだろう。

グインデルが拘束された私の顎を片手でつかむ。もし神殿騎士に腕をいまし戒められていなければ、恐怖のあまり私はその場に座り込んでしまったことだろう。

だが、私はどうしてもグインデルの脅しに屈したくなかった。

今まで騙されていたという悔しさもあつたし、門の向こうに送られた子供の悲鳴が耳に残っていて、どうしてもそれを良しとすることができなかった。

間近にあるグインデルの顔に、唾を吐つばきかける。

「嫌よ。絶対に嫌！ 送りたいなら好きにすればいい。でも私はあなたの悪事を絶対に忘れない。きつと天罰が下るわ。こんなこと許されるはずがない！」



私の叫びが、暗い地下室に木霊する。

グインデルは何事もなかったように袖口で顔を拭くと、突然大口を開けて笑い出した。

あまりにも大きな笑い声に、私をおさえている騎士たちの方が気圧けおされていたくらいだ。私はといえれば、もう何が起きても驚けないほどの極限状態だった。

「分かった。望み通りにしてやろう。お前は魔族の国と繋がるこの門を使って、やつらの食用の奴隷を送っていた。魔族の力を得るために。そしてそれを儂むに見とがめられ、自ら門に飛び込んだのだ」

そう言ったグインデルの目が、薄闇の中でほの青く光った。

いつも厳めしい顔が、どんな時よりも楽し気に残忍な笑みを浮かべる。

「グインデル、あなたまさか……」

いくら聖皇だからといっても、普通の人間の目が光ったりするはずがない。

ならば魔族の力を得たというのは、彼の事なのだろう。彼の言葉を信じるならば、さっきの人々は取引材料として魔物の餌にされたのだ。

私は耳にこびりついた子供の泣き声を思い出した。そして、門の向こうに連れて行かれてしまった人の悲鳴を。

「なんてひどいことを！」

叫んだのと同時に、涙があふれていた。

何の涙だろうか。

騙された悔しさだろうか。それとも裏切られた悲しさだろうか。色々な感情がない交ぜになって、胸の中で荒れ狂っていた。

そして更にひどいことに、グインデルは己の罪を私に押し付けようというのだ。おそらく私がいなくなった後に、信徒たちにそう説明するつもりなのだろう。間違っても、私が戻ってこないように。戻ってきてても、誰も私の言葉を信じないようにと。

「ひどいと思うならば、お前が救ってやればいい」

グインデルは楽しそうに門の向こうを指さした。

「まだ生き残っている者がいるかもしれない。聖女ならば救うことくらい容易たやすかろう」

わざと弄いじるように、グインデルが言う。

初代聖女と違い、私には魔物を退ける力なんてない。試したこともない。魔物なんて会ったことも見たこともないのだ。

そんな私が魔族の国に連れて行かれたところで、抵抗などできるはずがない。

絶望的な状況の中で、私はふと先ほどの白輝鳩の言葉を思い出していた。白輝鳩は私に逃げるようにと言っていた。

あの白輝鳩は、ミミル聖教会が裏で何をしているのか知っていたのかもしれない。

まさかそんなことがあるのだろうかと思いつつ、あの緑の目はこの状況を見通していたとしか思

えないのだった。

白輝鳩は神の言葉を伝える聖獣。

神が私に逃げるようにと言っていたのだろうか。

考えに耽<sup>ふけ</sup>る私に、グインデルが言った。

「二百年ぶりの聖女がこんなことになるなんて残念だ。それでも、お前には感謝しているよ。お前を見つけた功績で、私は聖皇にまで成り上がったのだから」

私が彼と一緒に王都に来たせいで、グインデルを増長させてしまったのか。そう思うと、悔しさと悲しさで頭がどうにかなりそうだった。

全てが正しいと思っていた。辛い修行も祈りの時間も、人々のためになれるならと我慢できた。

だというのに、終わりの瞬間はこんなにもあつけない。

無慈悲にも、グインデルは私を取り押さえている神殿騎士たちに目で合図をした。

後ろから押され、目の前の闇が近づいてくる。

魔族の国とは、一体どんなところなのだろう。魔族とはどんな生き物なのだろう。

グインデルは先ほどの人たちを魔族の食用と言った。魔族は人を喰うのだ。

こんなことなら、私も母と一緒に流行り病で死ぬばよかった。そうすれば、こんなに寂しい思いも怖い思いも、裏切られる悲しさも知らなくて済んだのに。

私が聖女として成したことは、間違った人を聖皇にしただけだった。

「お母さん……結局誰も助けてくれなかったよ……」

気が付けば、そう呟いていた。

人々のために働いても、いいことなんて何一つもなかった。私は全てに絶望していた。そしてそのまま、真っ暗な闇の世界へと押し出されて行った。